戦後初期における幼児生活団の実践とその展開
羽仁もと子・説子の幼児教育思想とその拡がり

大石海，有間梨絵，清重めい，長谷川真也，山田有紗（東京大学大学院教育学研究科）

Practice and Development of Jiyu Gakuen Children's Life Team in the Early Postwar Period
The Thought of Early Childhood Education of Motoko HANI and Setsuko HANI and Their Spread

Kai Oishi, Rie Arima, Mei Kiyoshige, Masaya Hasegawa and Arisa Yamada

Author's Note

Kai Oishi is a PhD student at the Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Rie Arima is a PhD student at the Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Mei Kiyoshige is a PhD student at the Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Masaya Hasegawa is a Master's student at the Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Arisa Yamada is a Master's student at the Graduate School of Education, The University of Tokyo.

This research was supported by Young Scholar Training Program from Center for Early Childhood Development, Education, and Policy Research (CEDEP), Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

The purpose of this study is to clarify the characteristics of the practice and its development in the children's life team after the war centered on the Osaka Tomo no Kai (Friends of Osaka), focusing on the infant education philosophy of HANI Motoko and Setsuko. It is attempted to depict the infant education practice of Japan mainly on children by positioning the aspect of the infant life group practice and the development after the war, while the thought of HANI Motoko and Setsuko before and after the war is continuously grasped. Here are three things that have become clear. First of all, in the philosophy of HANI Motoko and Setsuko, children were thought to have the power of independence by nature. The second characteristic of the team is that it is not a place to leave children but a place to educate and live. Third, the emphasis on arts and science education is significant.

Keywords: early childhood education, children's life team, Motoko HANI, Setsuko HANI, art
キーワード：幼児教育，幼児生活団，羽仁もと子，羽仁説子，芸術

戦後初期における幼児生活団の実践とその展開

羽仁もと子・説子の幼児教育思想とその拡がり

1　はじめに

本研究の目的は，大阪友の会を中心として戦後の幼児生活団（以下，生活団）における実践の特徴とその展開について，羽仁もと子・説子の幼児教育思想に着目して明らかにすることである。戦前・戦後の羽仁もと子・説子の思想を連続的に捉えつつ，戦後の生活団の実践の様相とその展開を位置づけることで，子どもを主体とした日本の幼児教育実践を描出することを試みる。

本稿で着目する生活団は，1938 年の雑誌『婦人之友』35 周年記念事業の一つとしての幼児生活展覧会に端を発し，理想の幼児教育の実現を企図して，1939 年 1 月にもと子とその娘・説子によって創設された。創設当初の生活団は，幼稚園令によらない「育児組合」的な組織として成立し，緩やかな連合の中で志ある母親との積極的な協働の中で子どもの生活に即した子育てを模索した幼児教育実践であった。自由学園の教育の一部として位置づくものではなく，あくまでもと子と説子の共同事業として認識されていた（菅原，2015）。そして，生活団は自由学園に附属したものだけでなく，全国にある『婦人之友』愛読者の会である「友の会」が各々の主催という形で，生活団を設置していくこととなる。

生活団に関する研究は，キリスト教関連の幼児教育史において設立当初の様子が描かれた研究（基督教保育連盟編，1941），その設立初期の構想を検討した研究（菅原，2015；菅原，2017），そして自由学園の生活団のこれまでの概要をまとめた『自由学園一〇〇年史』（自由学園一〇〇年史編纂委員会企画編集，2021）『本物をまなぶ学校　自由学園』（婦人之友社編集部編，2021）がある。また，生活団の実践に特に深く関わった説子の思想に関しても，『羽仁説子の本』を主資料としてその経歴と共に概観した研究（藤田，2011；藤田，2019）がある。しかしながら，生活団の創設者であるもと子・説子の思想と戦後に全国 12 か所まで波及した各地の生活団の実践の展開を連続的に検討したものはない。生活団の実践の特徴は，医学的・心理学的な当時の育児・保育に対抗して，家庭教育を基本としつつ週 1 の登団日を設けて，日常生活の営みのなかで子どもの主体性を尊重した人格形成を目指した点にある。生活団は，子どもたちが生き物の世話や集団生活のなかで発見したことを粘土や絵を用いて様々に表現する機会を準備した。それは，子どもたちが生活の中で自ら考え，表現し，学ぶ場所であった。本稿では，もと子・説子の思想を踏まえて生活団の実践を検討することで，生活を核として，子どもの人格を尊重した日本の幼児教育実践を描出したい。

以上のことから本研究では，生活団の戦前から戦後にかけた展開を描き出すべく，生活団の歴史の中で初期に成立した大阪の生活団と福岡の生活団を主な検討対象とし，その理念と実態を歴史的に検討することを目的とする。主な資料は，羽仁もと子著作集や雑誌『婦人之友』，大阪友の会所蔵の資料，福岡友の会所蔵の資料，東京友の会所蔵の資料，東京友の会と大阪友の会のメンバー並びに幼児生活団の卒業生に対するインタビューデータ，その他自由学園に関する書籍・雑誌等である。友の会所蔵の資料は，

出版されたものではなく筆者はその複写を得て分析に用いた。インタビューは，東京大学倫理審査専門委員会の承認を得て実施した。本稿では，まず生活団の実践を支える理論的支柱として，羽仁もと子・説子母娘の幼児教育に関する思想を押さえる（第 2 節）。その上で，その思想がどのように実現したのかを明らかにすべく，大阪の生活団の実践について一次資料を基に検討する（第 3 節）。そして，生活団と家庭のやり取りを明らかにする手がかりとして，福岡の生活団の連絡帳の中身を確認する（第 4 節）。最後にこれらを踏まえて，戦後の幼児教育史における生活団の位置づけについて考察を加えることとする。なお，引用に際して，旧字体はすべて新字体に改めて表記する。

2　幼児生活団を支える思想

2.1　羽仁もと子の思想

生活団では生活に即した幼児教育実践が行われた。本節では，羽仁もと子の幼児教育・子ども観に着目して生活団における「生活」と「教育」の思想を中心に検討する。

2.1.1　子どもの主体を重視する教育観

もと子は，子どもを 1 人の主体的な人間であることを認め，保育では子どもの人格形成を行うことを目指した。1938 年の雑誌『婦人之友』における「幼児生活団の提案」では「生活団の本拠」として「家庭生活，集団生活と簡単に区別したものではなく，それをすべて一つ統一総合して子供の生活に即し，人格にふれて経営してゆく」と提示された。さらに「今までの幼児教育は医学的心理的であっても，人格的ではあり得なかった」と指摘され，生活に即した子どもの人格形成が目指された[(1)]。

もと子は，子どもは生まれながらに「自分で生きる力」を与えられているという。そのような子どもの生きる力の可能性を大人が認識し，子どもの要求を知ろうとすることを「おさなごを発見する」と表現する。

> おさなごはみずから生きる力をあたえられているもので，しかもその力は親々の助けやあらゆる周囲の力にまさる強力なものだということを，たしかに知ることです。のみならず，そうしてその強い力が，われわれに何を要求しているのかを知ることです[(2)]。

もと子は，日々の子どもの生活状態と「一般嬰児の発育の状態」との間に疑問を見出すとき，専門の医師との相談や生活団の研究題目になるという[(2)]。もと子は子どもたちに「形に囚われた注文をすることは，大いなる非教育的なことのひとつ」であると述べ，子どもの主体や関心を重視する。幼児の場合は「あぶなくないように工夫して，出来る限り自由に独りでさまざまのことをして遊ぶように仕向けることが大切」であり，その中で大人が教えたり助けたりする機会を見出すものである[(3)]。もと子は子どもが自分自身で考え，判断することを重視する。親が善悪の判断を付けて子どもに禁止することは「警察官の態度に近い」といい，親は子どもが自ら判断して実行する機会を作るべきであると考える[(4)]。

他方で，子どもの生活における「よい習慣および規律」は幼い頃より与え，子どもの成長発達に伴って理解を養うことが目指された。もと子は「よい習慣」を与えることは「親のその子に対する最初の務め」であるという[(5)]。「不規

律やわがまま」などの悪い習慣を正すことは難しく,「嬰児」の頃から時間を決めて，湯に入ったり顔を洗ったりうがいをしたりして，よい習慣および規律を形成しなければならない[(5)]。幼児には「外形をもってまずよいことを鵜呑みにさせること」が必要であり，その幼児期における鵜呑みが，発達とともに子どもに理解されて，思想・信念として育って行くように助けていくことが大切である[(6)]。よい習慣の上に善悪を判断することができる力と悪いことを行わないという意志が養われると考えられた。

2.1.2　生活と教育

もと子は「よい教育をする」とはただ「よい生活をさせる」ということであると述べる。父母の生活が子どもの生命の基礎を作り，母親の生活が胎内での赤ん坊を育て，母親が生まれた赤ん坊を助けながら成長させる。母親は「事ごとに彼の肉体をつくり，またその精神をよい方にも悪い方にも」導くという点で，それが家庭教育であり，母の行う教育であるという[(7)]。

もと子は，子どもの教育とは，親や教師が自分たちの生活環境を改善しようと自覚的に知恵を出して真剣に生きることであると考える。親や教師は「第一に子供たちのために，その棲む所の環境を出来得るかぎりよいものにしようとして日々努力すること」が子どもにとって「一番大きな活きた教育」であるという。例えば，家庭環境が階級的であれば，家族の食べ物を平等にしたり互いの人格を認め合ったりして改善する努力を行うことである[(8)]。

2.2　羽仁説子の思想

前節で見た通り，もと子の幼児教育に関する思想を根本的な思想的枠組みとしつつ，説子がさらに幼児教育に関する思想を提示し，実際的な生活団の運営に取り組んだ。説子は，もと子・吉一夫妻の長女であり，1924 年に自由学園を卒業した後は,『婦人之友』の記者として働いた。説子の幼児教育への関心は，戦前における震災やセツルメント活動における社会の現状を目の当たりにしたところから始まったとされている（藤田，2011)。

戦後，説子は 1946 年に「婦人民主クラブ」，1952 年に「日本子どもを守る会」の創設に携わり，同会においては 2 代目会長（任期：1958-1988）を務めている。同会の現会長である増山均氏は説子のことを,「人権と平和・民主主義社会の建設のために奔走した日本を代表する女性活動家」[(9)]と評しており，戦後における社会活動が顕著な人物であったことがわかる。もと子同様，説子も様々な執筆物を残しているが，その中でも本節では,『羽仁説子の本』，周郷博と共著の『芸術教育』,『婦人之友』の諸論考を用いて，彼女の幼児教育・子ども観について触れられたもの，また芸術教育に関する思想を中心に取り扱うこととする。

2.2.1　幼児教育の根幹

女子中等教育に対するもと子の考え方同様，説子も幼児教育において「生活」を重視することを中核に据えている。こうした考えは,「生活教育こそ，最も簡単に自然にあらゆる幼児に恵まれるすぐれた教育である」という言葉に表れている。教育が外から付加されるものとして捉えるのではなく，幼児が生来もっているものに働きかけることが眼目であり，幼児の生命に寄り添い彼らの成長における格好の素材として「生活」があるという[(10)]。「すべての子供は出来る子供である」という理想を掲げているよう

に，説子たちは子どもを無能な存在として捉えていない。そして，幼児教育の重要性を主張する際に，それが早期教育に結びつき，単なるしつけや詰め込み主義へとすり替わることを危惧していた。

また，説子は集団生活に子どもを取り込むことの重要性も指摘する。家庭教育や母親との生活を重視するがゆえに登団は基本的に週一とする一方で，生活団として子どもが集まることの意義として集団の中でこその学びや成長に着目する。説子は，集団という教育的環境を生かす一つの方策として，動物の飼育を提案する。家庭とは異なり，集団で動物の飼育に取り組むことは，一つの命をみんなのものとして生かす中で「仕事」を持つ一員としての自信に目覚め，能動的主体となるのである[11]。実際の実践に関しては，次節で述べることとする。

2.2.2　芸術教育・子どもの人権への関心

説子は，幼児教育における芸術教育の重要性を強調していた。従来の芸術が贅沢なもの・軽薄なもの，あるいは日常から乖離したものという印象を否定し，芸術心が本来人間に与えられたものであり，芸術を高貴なものとし珍重し隔離するのではなく，生活そのものであるとした[12]。そして，幼児は「詩人的年齢」を経過しているところだと評し[13]，それらが親や教師の「危ない危ない」といった警告による阻害や，学校教育における時間割の設定のような「人間を小きざみに，なにかを片づけることを目標と」[14]するあり方が，日本における芸術教育の発展を阻んできたものとして批判する。

説子はこうした芸術教育に対する思想は，子どもの人権を守ること，そして単なる教訓を押し付けるだけに止まらない道徳教育に繋がるとも考えた。というのも，説子は「児童は，人として尊ばれる」と断言したうえで，「これまでの子どもということばは，幻想的な存在であって，それ自身ねうちをもっているかのような錯覚におとしいれられている特殊なもの」[15]として大人の愛玩物としての子ども像を封建的だと批判する。また，芸術の基礎はヒューマニズムにあると捉え，芸術と人間を分離することはその行為も封建的であるとし[16]，そもそも人と人とが尊重しあうということは，「人と人とが芸術的であること」と表現した[17]。人と人との関係が道徳的説教ではなく芸術によって醸成されることは，「文化のみが，子どもたち自身のなかに悪とたたかう力をよび覚ますことができるのである」[18]との言にも繋がり，封建的道徳教育ではなく芸術的道徳教育を提案するに至る。また，説子は具体的な検討を加えていないが，芸術教育に力点を置くことは，幼い子どもたちの「蟻の引越しを何時間でもしゃがみ，雲の動きを観察する力」のような，「人間は科学的存在だと言い切りたくなるくらい」の「科学的な探求力」を尊重することにも繋がるともする[19]。そして，芸術を重視する際，美術のための美術に陥ることなく，常に「生活」との結びつきを意識することの重要性を確認する。

以上のように，説子はもと子同様，生活と芸術を結びつける必要を幼児教育の文脈で主張し，子どもの身近な環境を芸術で組織することが，子どもの豊かな想像力を育むことに繋がるだけでなく，道徳教育あるいは子どもの人権の保護に繋がるとした。では，こうした思想を下敷きに或は実践における試行錯誤の中，友の会主催の生活団は戦後にどのような実践を行ったのか。友の会での著作集の読書会や各地の指導者同士の研究会を通して，もと子・説子の思想

が共有されていたものとして，その思想の視点から実践を捉えていく。

3　大阪友の会幼児生活団の実践

本節は，前節で明らかにしたもと子と説子の教育思想がどのように生活団で実現されていたのか，その具体相を大阪の生活団の実践を基に明らかにしていく。その際，大阪友の会からの諸々の提供資料,『婦人之友』掲載の関連記事等を主史料としつつ，2021 年 10 月 11 日のオンラインでのインタビューから知り得た内容などを検討材料とする。

大阪の生活団は，生活団の中でも古い部類に入る。1938 年 10 月に大阪でも展覧会が開催され，1939 年に自由学園の生活団が誕生したところへ大阪から研修生 2 人を派遣し，友の会会員が「お昼寝の布団作り」等によって準備を進め，1940 年 10 月 7 日に説子を迎え，31 人の子どもたちと共に大阪の生活団は発足した。1942 年に 4 才組を始め，1945 年 3 月の空襲によって一時閉鎖されたが，1948 年には有志の自宅で活動を再開し，1952 年には杉本町の「友の家」にて本格的に再開した。

3.1　基本的生活習慣の形成

大阪だけでなく，生活団の教育で何よりも重視されたのが，手洗い・うがいといった基本的生活習慣を身に着けさせるための「生活講習」である。説子も「子供を強くするために与えられたすばらしい教材は「生活」である」[20]と述べているように，基本的な生活習慣を子どもたちに身に付けさせることに注力した。

生活講習における代表的な，生活団独特の教材として,「励み表」が挙げられる（写真 1)。励み表は，毎日の生活の中で繰り返される所々の営みを，子どもに競い合いさせながら身に付けさせる記録として機能しており，元は自由学園の初等部の生徒と中等部の 1〜6 年生の生徒とで夏休みに南沢の寄宿舎にて行った合宿にて編み出された[21]。

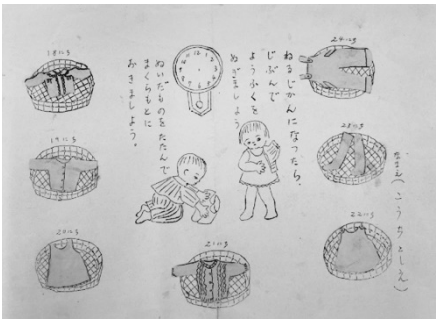

写真 1：大阪の生活団で使用された励み表[22]

写真 1 は衣服をきちんと畳んだかを記録するための励み表で，他にも冷水摩擦，昼寝，靴を揃えたか，ご飯をこぼさず食べたかなど，場面ごとに作られた多様な励み表が存在する。そして，これらが指導者[23]たちの絵によって独自に作られた教材であることが特徴的である。子どもたちのやる気のために，子どもたち自身の絵をシールにして使用することもあるという[24]。週一の登団日にお互いの励み表を確認し，週の残りの曜日は励み表をもとにした家庭における生活の訓練を重視していたのだ。

これによって成長するのは，子どもだけでなく，保護者もまた然りである。幾人かの保護者は，励み表の記入に際し，子どもたちができなかったことを注意したり，励み表の色をきれいに塗りシールを毎日貼ることに気を取られたりしてしまうことを反省していた。しかし，指導者達が子どもたちを辛抱強く見守ることが肝要であると保護者達に伝える中で,ある保護者は,「励み表は全部貼れることがいいことではない。

きれいに仕上がるのが日課ではない。貼れなかったところ，塗れなかったところにこそ，物語がある」[25]と気付くに至る。父母会という別の場ではこれを言い換えて「手をかけずに心をかける」ことが，幼児教育だともする[26]。1938 年の「おさなごを発見せよ」という論考にてもと子は，生まれたばかりのみどりごも「自分で生きる力を与えられている」という。そして，親や周囲からの助力や影響はあまりに強力で，時に「赤ん坊の真の生命の要求」を抑圧してしまう[27]。「励み表」に関するこの気づきも，子どもの生来の力を信じ，見守ることの重要性を説いている。そしてそれは，週 1 回だけの登団という形式に意味を持たせており，登団日に成果を共有し，登団しない日は，親子一体となって課題に取り組んでいたのである。

3.2　伝書鳩の実践

伝書鳩の実践は，生活団の代表的な取り組みの一つであり全国の生活団で展開された。子どもたちは伝書鳩の世話や飛行訓練を通して，孵化や鳩のからだの仕組み，地形や地図を学び，粘土や絵で鳩を表現した。

大阪の生活団では，鳩が生きているときだけでなく，死んだ後にもその学びは続いていた。1956 年の 1 月 18 日のこと，その前日に鶏の一羽が死んだ。その鶏をめぐって，野口英世の解剖の紙芝居を見た後，皆で解剖することとなった。お腹があげられ心臓・胃袋・肺・肝臓・腸・卵と一つ一つに説明が加えられる中，実際に子どもたちはそれらを手に取り，腸の長さと自身の背丈を比べたり，眼を開けたり閉めたりして思い思いに鶏の解剖した姿と対峙した。結果として，その鶏の死因は食べ過ぎであったことを突き止めた[28]。

また大阪では，1961 年に 16 回生が 5 才組の時に朝日新聞社から伝書鳩のつがいをもらい受け，1963 年の卒業式で初めて鳩の報告をした内容が「卒業式プログラム」に残されている。17 キロ先の二上山（大阪と奈良の県境近く）からしか飛んだことがなかった鳩を 100 キロレースに出すべく，浜大津から 50 キロの予備訓練を行った。子どもたちは，自分たちの手で 400 羽の鳩を一斉に放ち，鳩が空いっぱいに広がって山の向こうに消えていく様子が強く印象として残ったようである。次の生活団で子どもたちは，浜大津から飛び立った鳩が見た景色や気持ちを想像し，みんなで絵を描いた。部屋を一回りする程の長いダンボールに，浮城山・京都の町・畠・川・大阪城・通天閣・二上山電車・自動車などの景色を描き，絵巻物のような作品となった。子どもたちは卒業式で鳩のことを一番見せたいとのことであった。「鳩の小父さん」から種鳩をもらい受け，5 才組のクリスマスに小さな卵から孵化もさせ，鳩に番号をつけ，生活団の場所を覚えさせる舎外訓練をしたことなど，発表したい出来事がたくさん出された。卒業式で報告することを「紙芝居・粘土」「四方訓練の地図」「鳩劇」の 3 つのグループに手分けして準備した。卒業式では，それらに加えて子どもたちが作曲した 4 曲の「はとの歌」も発表された[29]。

1973 年には二度にわたって鳩が盗まれるという事件が発生した。そのことは朝日新聞で取り上げられ，6 才組の子どもによる「はやくかえしてください」という手紙と共に掲載された。当時の生活団では，4 才組が十姉妹，5 才組がウズラ，6 才組がハトの当番を行っていた。鳩が盗まれた 3 月 5 日の翌日には，6 才組の最後の行事である金剛山から鳩を飛ばす遠足があっ

た[30]。盗まれた鳩のうち 5 羽が無事に帰ってきた。友の会はすぐに子どもたちに電話で連絡し，子どもたちは「先生，ほんとうなの」と嬉しい声がはずんで聞こえたという[31]。

2015 年には大阪市北区，新聞社の 13 階テラスから 12 羽の伝書鳩を飛ばした。2015 年当時では，6 才組の 9 人が 21 羽を飼育し，2 人一組で鳩舎の掃除や餌やりを行う。指導者の原節子は「小さな命を育てることで子どもたちに責任感が育ち，成長につながる」と話し，卵から孵化させ，鳩を 100 キロ飛ばす実践が継承されてきた[32]。

写真 2：朝日新聞（夕刊）1973 年 3 月 12 日

鳩の実践は大阪だけではなく全国の幼児生活団で取り組まれた。東京友の会の落合幼児生活団では，4 才組が十姉妹，5 才組がモルモット，6 才組が鳩の当番をしていた。子どもたちは鳩の世話や伝書鳩としての訓練を通して感じたことを美術や音楽で表現した。作品は絵巻物や歌，遠足で使う敷物になった[33]。

1954 年 3 月にもと子が書いた「生活団の子供と伝書鳩」には，神奈川県の二宮友情庵から，学園の幼児生活団の子どもたちが伝書鳩を飛ばしにやってきたことが書かれていた。それ以前には横浜のニューグランドから生活団に向けて伝書鳩を飛ばすことに成功していたらしく，今

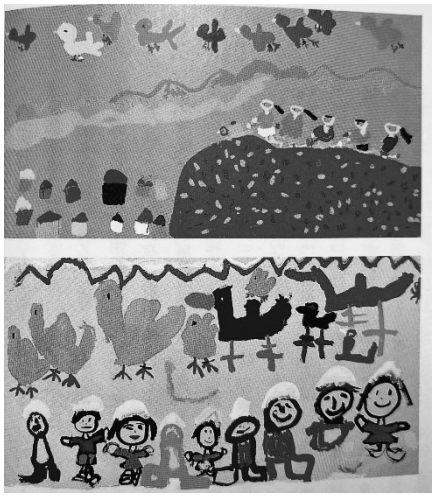

写真 3：絵巻物：落合幼児生活団における卒業前の鳩とばし遠足の合作

回はさらに飛距離を伸ばすことを目的として，もと子のいる二宮を訪ねたという。その際，鳩とは別に育てている鶏の卵で作ったケーキをもと子へ贈っていた[34]。

3.3 「手作りの教育」

大阪の生活団もそうだが，どの団でも保護者も参加した「手作りの教育」が展開されていた。具体的には，子どもたちの昼食や間食を作ること，そして子どもたちの作品作りに参加することであった。それらをここでは具体的に見ていこう。

3.3.1 幼児食ノート

子どもたちの昼食や間食は，生活団にある台所で数人の母親が手作りすることを慣習としていた。そういった活動が蓄積され，1956 年，大阪友の会では，父母会によって大阪友の会の 30 周年記念として「幼児食ノート」[35]が作成された。このノートは，1954 年に開催された「こどものたべものきもの展覧会」を契機に，軽食は

おやつではないこと，4 回食[36]が大切なこと，生活団の食事量の基本，栄養計算などを再検討したものである。ノートの中には秋から冬にかけての献立の他，幼児用の食料構成基準表や匁・瓦間の換算表が掲載されていた。ここから発展して，「幼児食献立カード」や「幼児食ハンドブック」作成へと至っている(表 1)。

表 1：幼児食ノートの展開[37]

年	内容
1956	友の会 30 周年記念会　幼児食ノート　父母会が作成
1968	幼児食献立カード作成　4・5・6・才組、食の係が編集
1977 年	食事献立カードとして一冊の本を作成　30 回生が作成
1978 年	幼児食ハンドブックを作成　31 回生の時に作成
1981 年	幼児食ハンドブックの改訂　35 回生の時に作成
1986 年	幼児食ハンドブックを作成　39 回生の時に作成
1989 年	幼児食ハンドブックを作成　42 回生の時に作成
1996 年	幼児食ハンドブックを作成　49 回生の時に作成
2014 年	幼児食ハンドブックを作成　67 回生の時に作成
2017 年	幼児食ハンドブックを作成　70 回生の時に作成

こうした活動の背景には，子どもの食事への拘りがある。これは生活団だけでなく，成長期の子どもたちに温かい食事を提供することを主たる目的として，学園の方でも女子部の生徒たちは自ら食事作りに取り組ませていたことにも通じる[38]。こうした取り組みは，保護者の学びにもつながり，家庭でも作れる献立のレパートリーが増えたこと，量も多く時間制限のある生活団のための昼食づくりを通して料理のスキルが上がったこと等が報告されている[39]。

3.3.2　子どもと保護者の協働

生活団における保護者の手作りは食の他にも，衣方面でも見られた。

第一に，生活団自体が母親たちは手作りによって形成されていた。まず，大阪と神戸の生活団設立の準備に際して，友の会青年班が集まって，紙芝居をかいたり，お昼寝用の布団を縫ったりなどしていた。その背景には，「清潔に衛生的なものを，そして美術的なものでなくてはならない」[40]という信念があった。芸術への拘りは第 2 節における説子の思想にも表れているが，より詳述すれば，色彩教育への拘りがあった。すなわち，りんごは赤，葉っぱは緑というような固定化した色彩の概念を教え込むことはせず，子どもの感性に合わせて色をぬらせることを試みていたのである[41]。

第二に，保護者と子どもが一体となった活動として，子どもが描いた絵を保護者が立体物にする，といったことがしばしば行われていた(写真 4)。

写真 4：保護者の作品[42]

これに類似した取り組みとしては，クリスマスプレゼントとして，子どもたちが自ら描いた絵を基に，母親がクッションやタペストリーなどに仕立てるという企画[43]もあった。このように指導者や保護者が，子どもの身辺の用具を手作りすることの意義とは何か。1980 年代に生活団に子どもが通ったある保護者は，以下のように考える。

衣類の手作りが苦手だけど……どんなに下

手なものでも子どもが喜んでくれ,……「子どもにとって着やすい」といった形の問題にとどまらない，心のつながりを作っていくもの……暮らしとは，心と形（物）とがともにつむがれてよいものになっていく[44]

こうした活動の起源は不明だが，生活団では作品の良しあしを問わず，保護者が子どものためにモノを作るという行為そのものに大きな意義を見出していた。説子の思想にもあったように，生活団では，幼児期における芸術とのふれあいが重視された。そして，鳩の実践でも見られたように，芸術活動を単体で完結させるのではなく，他の活動と結びつけて行うこと，さらに，子どもだけでなく保護者も参加して取り組まれていた。

4　福岡友の会幼児生活団の資料

本節では，福岡の生活団の「連絡帳」という史料を基に，生活団における実践の具体を補足的に描き出す。大阪友の会から提供していただいた史料にはこの連絡帳はなかったが，東京友の会を通じてこれらの史料を提供してもらうに至った。連絡帳は生活団共通のツールであり，指導者からみた生活団という視点を描くのに非常に有益な史料であることに鑑み，福岡のものではあるが大阪等の生活団でも同じような内容であると捉え，本節にてこれらの史料，とりわけ 1972 年度の 4 才組，1969 年度の 5 才組の連絡帳を概観し，生活団の実践において連絡帳が果たした役割を検討する。

4.1 「連絡帳」の概要

連絡帳とは，毎回登団時に指導者によってその日の活動が記録され，子どもたちに配られるものである。これらは指導者と保護者のやり取りが記録される一般的な個別的連絡帳とは異なり，全員に共通の紙面が配られる点が特徴的である。特定の個人向けではない分，団全体の様子が読み取れるものとなっている。

連絡帳には，登団日の子どもたちの様子が手書きで事細かに記されている。構成としては，日付・天気・出席人数・欠席者の名前・1 日の活動内容や子どもの様子・本日の献立・持ち物やイベントの日時などの業務連絡が，順番に書かれている（写真 5）。活動内容と子どもの様子が多くの分量を占めており，具体的な時刻，子ども一人一人の名前と共に，時系列に沿って登団中の子どもの様子が詳述されている。このような具体的な記述から，指導者が保護者に登団中の子どもの様子や指導者の願いをわかりやすく伝えようとしていること，生活団の運営形態の周知徹底を図っていることがうかがえる。

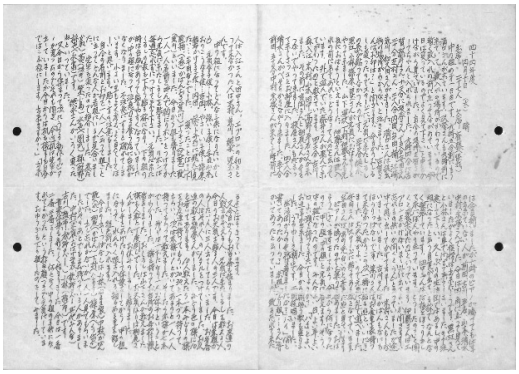

写真 5：1969 年度 4 月 10 日の連絡帳[45]

大阪の生活団における例でも言及した通り，生活団の実践では基本的な生活習慣の形成が重視されている。そして，連絡帳においては，そうした生活習慣に関する子ども一人一人の達成度が丁寧に記述されていた。例えば，子どもた

ちが挨拶をできるようになることを非常に重視しており，挨拶ができた・できなかったということに関する記述が多く見られた。他にも，忘れ物や食事，エプロンの着脱などもその対象となっており，場合によっては子どもの個人名も挙げつつ記載されていた。

4.2　生活団における自立を促す姿勢

連絡帳の記述から見えてきた，生活団の教育姿勢に関する一つのあり方として，「係」を決めることや「話し合い」を頻繁に行うことによって子どもたち一人一人を自立した一つの個として捉えている点が挙げられる。

例えば，1972 年度の 4 才組の行事の一つとして，夏の 1 泊 2 日の「お泊まり勉強」[46]がある。お泊まり勉強とは，8 月後半に生活団にて宿泊訓練をするものである。自分たちの生活に責任をもって取り組むために，子どもたちは係を決める。「係になるのは，皆が自発的に決めてマークをつけていましたので，その仕事をする自覚を強く張り切ってやっていた」[47]とある通り，子どもたちは係をやる上では一人前の存在として扱われている。具体的な係としては，昼食係，夕食係，ひるね用意係，夜の布団係，飼育係とあった。係決めの後は自由制作に取り掛かり，粘土，工作，絵から子どもが好きなものを選び制作した。連絡帳には絵の班について厳しい記述として，「合作はよく四人で話し合って一枚の絵にするのだと説明しても四人共少しも話し合おうとはせずそのままになってしまいました」[48]とあるが，これは話し合いや独創性の伸長を子どもに願う指導者の思想の表出でもあった。その後は普段と異なる活動も含みつつも，生活習慣に関する紙芝居や励み表のチェック，そして鳩飛ばしなど，お泊り勉強が普段の生活団の実践の延長となるような内容が組まれていた。

また，同年 10 月 21 日に「南公園北側展望台広場」で行われた運動会においても，子どもたちは 11 の係に分れてそれぞれ役割を担った。各係には，運動会委員，競技・グラウンド係，会場整理係，子供メタル（ママ）係，子供係（トイレ），写真係，卒業生係，スピーカー係，救護係，荷物運搬係，会場用意係があった[49]。運動会後の次の登団日にあたる 10 月 23 日には，運動会についての話し合いが行われた。子どもは「中の組の身支度競争は，カーデガンをきてカバンに箱を入れて傘さして走った」などと振り返っていた。また「鈴わり」という競技については「ボールを投げて中から風船が出てきたのが面白かった」という声や，他の子どもからは「ふうせん自分ででたの」，「ハトはどうしたの」という声が聞かれ，これに対して指導者は「生活団にちゃんと帰っていましたよ」[50]と答えている。

また，生活団における話し合いは，子どもの体験していることを聴く場であると共に，子どもに正しい判断を促す場でもあった。次に示すのは，新しい組になって 2 回目の登団日（4 月 17 日）の 1969 年度 5 才組の様子であり，安全に登団するために「生活団に来る道の話し合い」を行っている。指導者が「道を歩くのに今日見ていたらいろいろの人がいました〔。〕どっちを歩いたらいいでしょう」，と尋ねれば子どもたちは「道のすみっこ」「すみっこでもどっちのすみっこでしょう」「あっち」と右手を上げて，右を通ることを学んだ。いくつかの問答の末，「生活団にくる道」の紙芝居を見てさらにどうしたらいいのかを考えている[51]。このように生活団では，話し合いが登団日のたびに行われてお

り，指導者からの問いに対する子どもの自立的な判断や発言が重視されていた。それ故に連絡帳には子ども一人ひとりの発言が全員分名前と共に記載されていたのである。

4.3　保護者と指導者の架橋としての連絡帳

連絡帳は，基本的に保護者が日中の子どもたちの様子を知るために書かれるものだが，具体的に生活団の指導者と保護者をどのようにつないでいたのか。

例えば，先述したお泊まり勉強の場合を挙げよう。生活団にとってお泊まり勉強は，2 日間の活動として終止するに止まらない。2 日間の連絡帳とは別に「尚，くわしい個人別の連絡は次回お送りします」(52) とあるように，指導者は子ども一人ひとりの様子についての詳細な記録を後日改めて書く。そしてその後，「詳しい個人別の連絡」が家庭に送られる。子ども全員について，それぞれの担当指導者から記録されている。以下の記述は，ある子どもについての記録である。

> ○○さん…第一日おやつ第二日おひるねの係でした。二日を通して少し緊張している様子でした〔。〕荷物の整理はよく出来ていました。遠足で広い芝生でお弁当食べるより昆虫を追っかける方に興味があるようでした。（中略）湯船の中では竹の葉が見えるお空もみえるという余裕も出ました。○○さんと入ったのですが水のお風呂が珍らしく二人で自分の家のお風呂の説明をしています。「タオルに石けんつけるときは，ひざにタオルをのせて石けんつけるよ」と片ひざたてて，石けんをつけました(53)。

一方で別の指導者は，独創力や強い自信を持った子どもになることを願うあまり，子どもの姿に対して残念な思いを記している。例えば，「仕事をする時はもう少し，自信を持って，自己の独創力を養ってほしいと切に思われました。自信のある仕事やわかっている事は，どんどん他人に教えて先に立って，できるのに，新しい事は不安がります」(54) とある。このように，淡々と保護者に事実を伝えるだけに止まらず，指導者側の願いも強く現れた記録がよく見受けられた。

また，保護者は子どもと家でこの出来事について話し合いをし，それを記録し生活団に手紙で送っていた。先述のお泊まり勉強に関する連絡帳には，「お泊まり勉強の感想文，お子さんの話したことその他二十九日（火）に生活団につく様に罫紙に書いて御出し下さい」や「今日お渡しするおはげみは，お泊まり勉強の生活表などを参考に，今一番できていないことを親子で話し合ってテーマを決めてください」(55) とある。お泊まり勉強に限らず他の行事でも同様であるが，保護者が子どもと話し合いをする点やそれを記録するという点において，生活団の家庭内での教育，つまり家庭内での子どもの姿や発言の見取りを重視する姿勢が読み取れる。

5　おわりに

自由学園における生活団は，2007 年以降週 1 の体制から週 5 の体制へと変更することとなった。共働き家庭の増加に伴い，平日は毎日預かってもらえる一般的な保育の需要が高まってきたからである。今回対象とした大阪の生活団に関しても，2022 年 3 月をもって閉団となった。時代の変化に伴い，生活団のあり方も変わらざるを得なくなる中，幼児教育史において生

活団とはどのように位置づけられるのか。以上の検討から明らかになったことを 3 点述べる。

第一に，羽仁もと子と説子に関する思想において，子どもは生来から自立の力をもっていると考えていたことである。もと子も説子も子どもの自主性・能動性を強く信じ，教育とは外部からの押し付けではなく，内部に秘めた力を引き出し伸ばすことと考えていた。そして，こうした考え方は，子どもの「生活」そのものを教材とし，子どもの権利を尊重するという発想へとつながった。子どもの権利を重視するという思想は，それらに戦前から着目し幼児教育を組み立てようとしていた説子たちには先見性があったといえる。

第二に，生活団のあり方として，子どもを預ける場所ではなく，教育・生活する場所であることの徹底が特徴的である。週 1 回だけの登団というあり方も，子どもたちが生活団で学んだことを親と共に咀嚼する期間として他日を捉えていることの現われであり，子どもの成長を主体とした教育機関であるというスタンスが強い。また，そのための教材として手作りの励み表があり，母親たちによる昼食づくりという仕組みがある。子どもの絵を母親がクッションなどにするという実践からもわかる通り，家庭と生活団の距離が非常に近く，指導者たちの実践であるのみならず，母親たちの実践ともいうべき状況にある点，注目に値する。

第三に，芸術教育と科学教育の充実への注力が大きいことが挙げられる。特に鳩の実践では，鳩の飼育を起点として，紙芝居や粘土での作品作り，鳩飛ばしの実験による数学的な学び，解剖体験による理科的な学びなど，多岐にわたる学び・経験が生み出されていた。芸術・科学の教育を各々単体で行うのではなく，一つの対象を軸に融合させた学びを実現させていたのである。

生活団はその成立背景・実践内容共に，一般的な幼稚園･保育園とは大きく異なる。それは，もと子・説子という強い理念を抱いていた人物がいたこと，そしてその実践の大元が『婦人之友』を媒介とした全国の家庭が協力した調査の結果に基づいて形成されていったことが大きな要因だろう。

今後の課題としては，他の生活団の調査に基づくより詳細の生活団の実態の描出を挙げておく。コロナ禍ということもあり，十分な史料収集が行えず，今回は大阪友の会と福岡友の会のみを焦点化したが，他の生活団における実践の様相，そして自由学園の生活団を合わせた大きな一つの幼児教育の枠組みとして描く必要があるだろう。

謝辞

本報告を作成するにあたり，貴重な一次史料を提供し，貴重な時間を割いてインタビューへご協力くださった東京友の会・大阪友の会関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

注

（1） (1939).「幼児生活団の提案」，婦人之友編集局編 『幼児の生活と教育』，婦人之友社，216-217 頁.

（2） 羽仁もと子（1965).『羽仁もと子選集第 3 おさなごを発見せよ』，婦人之友社，7-16 頁.

（3） 羽仁もと子（1928).『羽仁もと子著作集第 11 巻 家庭教育篇（下)』，婦人之友社，62-69 頁.

（4） 羽仁もと子（1928). 70-75 頁.

（5） 羽仁もと子（1965）．53-59 頁.
（6） 同上．159-164 頁.
（7） 同上．175-181 頁.
（8） 羽仁もと子（1928）．24-34 頁.
（9） 増山均（2019）.「羽仁説子と菅忠道：子どもを守る運動の偉大なリーダー」,『子どものしあわせ：母と教師を結ぶ雑誌』, 日本子どもを守る会編，821，11-13 頁.
(10) 羽仁説子（1938）.「幼児生活展覧会開会二三日」,『婦人之友』, 32，7，122-128 頁.
(11) 羽仁説子（1980）.『羽仁説子の本 1（幼年教育）』，草土文化，230-231 頁.
(12) 羽仁説子・周郷博編（1953）.『芸術教育』，牧書店，70 頁.
(13) 羽仁説子（1980）．263 頁.
(14) 羽仁説子・周郷博編（1953）．70 頁.
(15) 羽仁説子（1980）．301 頁.
(16) 羽仁説子・周郷博編（1953）．55 頁.
(17) 羽仁説子（1980）．262 頁.
(18) 同上．283 頁.
(19) 同上．287 頁.
(20) 「大阪友の会幼児生活団特別号」．1956 年 3 月 20 日号.
(21) 自由学園女子部卒業生会編（1991）.『自由学園の歴史Ⅱ：女子部の記録（1934～1958 年）』，婦人之友社，69-72 頁.
(22) 大阪友の会　提供資料.
(23) 生活団では一般的な「先生」「教師」という呼称ではなく「指導者」という呼称が使われている。自由学園幼児生活団を中核として，1965 年以降「幼児生活団指導者研究会」が実施され，実践の交流・研鑽が積まれている。
(24) 2021 年 8 月 4 日，東京友の会でのインタビューにて.
(25) 東京友の会落合幼児生活団編（2004）.『心とからだのひとりだちをめざして：東京友の会落合幼児生活団のあゆみ』，東京友の会，212 頁.
(26) 東京友の会落合幼児生活団編（2004）．249 頁.
(27) 羽仁もと子（1950）.『羽仁もと子著作集第 18 巻 教育三十年』，婦人之友社，75-84 頁.
(28) 2021 年 10 月 11 日，大阪幼児生活団の卒業生へのインタビューにて.
(29) 「ようじせいかつだんそつぎょうしきプログラム」1962.（大阪友の会所蔵，複写を筆者所蔵）
(30) 朝日新聞（夕刊）1973 年 3 月 12 日
(31) 朝日新聞（夕刊）1973 年 3 月 15 日
(32) 朝日新聞（夕刊）2015 年 11 月 26 日
(33) 東京友の会落合幼児生活団編（2004）．227-228 頁.
(34) 羽仁もと子（1983）.『羽仁もと子著作集第 21 巻　真理のかがやき』，婦人之友社，148-151 頁.
(35) 大阪友の会　提供資料.
(36) 4 回食とは，友の会の調査結果から幼児に推奨された食習慣のことで，朝食 6～7 時，昼食 11 時～11 時半，軽食 2 時半～3 時，夕食 6 時～6 時半という時間帯に食事を摂取することを指す.
(37) 大阪友の会 提供資料を基に，執筆者が作成.
(38) 自由学園女子部卒業生会編（1985）.『自由学園の歴史Ⅰ：雑司ヶ谷時代』，婦人之友社，39-40 頁.
(39) 東京友の会落合幼児生活団（2004）．62，123 頁.

(40)　(1940).「たのしい協力 神戸・大阪幼児生活団の創設間近し」,『婦人之友』, 34, 10, 口絵.

(41)　(1946).「幼児教育とおもちゃ」,『婦人之友』, 40, 9, 17-24 頁.

(42)　大阪友の会　訪問時に執筆者が撮影(2021 年 9 月 16 日).

(43)　東京友の会落合幼児生活団編 (2004). 206 頁. 並びに 8 月 4 日のインタビュー.

(44)　東京友の会落合幼児生活団編 (2004). 154 頁.

(45)　福岡幼児生活団連絡帳 (5 才組) 日誌, 1969 年度 4 月 10 日.

(46)　福岡幼児生活団連絡帳 (4 才組)「お泊まり勉強を終えて」, 1972 年度 8 月末.

(47)　自由学園では, 1950 年から開始されている.

(48)　福岡幼児生活団連絡帳 (4 才組) 日誌, 1972 年度 8 月 22 日.

(49)　福岡幼児生活団連絡帳 (4 才組)「運動会についてのおしらせ」, 1972 年度 10 月.

(50)　福岡幼児生活団連絡帳 (4 才組) 日誌, 1972 年度 10 月 23 日.

(51)　福岡幼児生活団連絡帳 (5 才組) 日誌, 1969 年度 4 月 17 日.

(52)　福岡幼児生活団連絡帳 (4 才組) 日誌, 1972 年度 8 月 23 日.

(53)　福岡幼児生活団連絡帳 (4 才組)「お泊まり勉強を終えて」, 1972 年度 8 月末.

(54)　同上.

(55)　同上.

参考文献

基督教保育連盟編 (1941).『日本基督教幼稚園史』, 基督教保育連盟.

自由学園女子部卒業生会編 (1985).『自由学園の歴史Ⅰ：雑司ヶ谷時代』, 婦人之友社.

自由学園女子部卒業生会編 (1991).『自由学園の歴史Ⅱ：女子部の記録 (1934～1958 年)』, 婦人之友社.

自由学園一〇〇年史編纂委員会企画編集 (2021).『自由学園一〇〇年史』, 自由学園出版局.

菅原然子 (2015).「幼児生活団の設立経緯：羽仁もと子・説子の幼児と母への働きかけ」,『生活大学研究』, 1, 54-70 頁.

菅原然子 (2017).「幼児生活団の教育構想にみる英米ナースリースクールの影響：1930 年代の羽仁説子の幼児生活への関心を手がかりに」,『生活大学研究』, 3, 20-42 頁.

全国友の会中央部 (1986). 幼児生活団指導者研究会の記録 友の新聞掲載の中より.

羽仁説子 (1980).『羽仁説子の本 1 (幼年教育)』, 草土文化.

羽仁説子・周郷博編 (1953).『芸術教育』, 牧書店.

藤田泉 (2011).「羽仁説子の幼児教育観についての考察 (その 1)」,『平成音楽大学紀要』, 10(1), 41-57 頁.

藤田泉 (2019).「羽仁説子の幼児教育観についての考察 (その 2)」,『平成音楽大学紀要』, 19(1), 67-77 頁.

婦人之友社編集部編 (2021).『本物をまなぶ学校自由学園』, 婦人之友社.

付記

本稿は, 共同研究として執筆者全員の関与合意のもとに計画・執筆・推敲をして作成した原稿である。ただし原稿においては, 1 章から 3 章を有間・清重, 4 章を長谷川・山田, 5 章を清

重が執筆した。

付録

表 2：1956 年度の大阪友の会幼児生活団の一年

4 月 12 日	5 才組 1 学期はじまる	9 月 13 日	5 才組 2 学期はじまる
13 日	6 才組 1 学期はじまる	14 日	6 才組 2 学期はじまる
5 月 9 日	貝塚へ潮干狩りにいく 6 才組	10 月 5 日	ヒヤシンス水栽培はじまる 6 才組
12 日	鶏に卵をだかせる 6 才組	12 日	香里國の川島様宅へ遠足 5 才組
24 日	大和川へ遠足	22 日	二上山にのぼる 6 才組
31 日	廿日大根をまく	11 月 1 日	クロッカス水栽培はじまる 5 才組
6 月 1 日	ひよこ生まれる	29 日	2 組一緒に体操会をする
21 日	廿日大根収穫	12 月 20 日	友の会クリスマスに 6 才組「こぎつね」を演奏する
7 月 13 日	今日から 9 時半にはじまる 6 才組	21 日	生活団クリスマス冬休みはじまる
26 日	お泊まり勉強のための父母会をする 6 才組	1 月 17，18 日	3 学期はじまる
19，20 日	5，6 才組 1 学期おわる	24 日	一人で来ることに励む 5 才組
7 月 29 日，8 月 2 日	夏休みお泊まり勉強 2 組に分かれて 2 日ずつ友の家にてする 6 才組		